

寒
露

季刊はないく

- 1 花屋さんはお医者様
- 2 花とはなそう
- 3 贈花辞退を考える
- 4 愛知県の「花育活動」への取り組み

1 花屋さん、お医者様



愛知名港花き卸売事業協同組合

副理事長 所 和正

新市場開設までに10年の歳月がかかりましたが、今年4月にやっとスタートを切ることができました。最初は、買受人の皆様も機械セリ（価格入力方式）に慣れなかったのですが、時間とともに不安も消え、今では機械操作には何の問題もなくなりました。また、新市場では商品の入庫・仕分・出庫までを一体化した搬送設備を導入しましたので、市場内の物流が今までに比べ迅速になり、確実に時間が短縮されています。ここに来てやっと市場全体の雰囲気も落ち着き精神的な余裕もできましたので、「季刊 はないく」No2発行に当たり、一言書かせていただきます。

私ごとですが、3年前に妻を癌で亡くしました。その折、「花祭壇」という大変手間のかかる葬儀をして頂きました。33年間苦勞を掛けた妻、花に囲まれた棺の姿を見て悲しみの中でも思い出にふけることができ、癒されました。葬儀も終わり7日7日（なぬか・なぬか）のお勤めの折には鳥居生花店様に供花をお願いし、「二・七日は白で統一した花」、「三・七日は少し色を加えた花」、「七・七日は華やかな色の花」で供えました。その日々は、花に悲しみを癒されました。花は、悲しい時、うれしい時、病の時、その折々に優しく心を支えてくれました。今回、自分が体験して初めて花の奥深さを知りました。また、それを提供してくださる花屋さんに大変に感謝しました。

■花セラピーとは

①花の発散する「気」をもらう

- たった一輪の花が、心をホットさせてくれることがあります。花はどんな人の心にも安らぎを与え、美しい姿で私たちの目を楽しませてくれます。しかもそれだけでなく、花は人の体の不調な部分を、元に戻してくれるパワーを持っています。そのパワーとは、花が放っている「気」で東洋医学では、人体を「気」が正常に流れていれば健康が保たれ、流れが停滞して循環が悪くなった時に不調を来すと考えられているが、中国古来の哲学「陰陽五行説」に基づいた花セラピーは、「気」が乱れて体調が悪くなった時、花を飾り、その花の「気」で健康な状態に戻そうというものです。

②5つの花の色がキーカラー

- 花セラピーの最大のポイントである「気」と「気」が合うという考え方は、陰陽五行説に基づいていて、これは自然界のあらゆるものは陰と陽の要素を持ち、両方のバランスがとれて初めて完成されます。同時に、万物は5つの物質（木、火、土、金、水）からできていて、それぞれが運動し、影響を与えながらバランスを保っています。この自然界の現象は、そのまま人体と色にも当てはまります。木は「肝」で色は青、火は「心」で色は赤、土は「脾」で色は黄、金は「肺」で色は白、水は「腎」で色は黒（花セラピーでは紫）としています。花セラピーでは、この考え方を花に結びつけ、さらにその花の香りと形を加えて、バランスの崩れた体に足りない「気」を抑える効果をねらっています



③陽の花と陰の花の働き

- ・自然界は、陰と陽から成り立っています。例えば、「春夏は陽」で「秋冬は陰」、「昼間は陽」で「夜は陰」というようになります。どちらかが優れているというわけではなく、両方が対立しながら支え合い、補い合ってバランスを保っています。花も「陽の花」と「陰の花」に分けられます。「陽の花」は赤、オレンジ、黄色などの暖色系の花やユリ、バラ、ランなどの強い花があります。「陰の花」は青、紫などの寒色系の花、白い花、淡い小さな花で、スターチス、カスミソウ、マーガレットなどがあります。「陽の花」は活力を与え、「気」を活発にするので、気分が沈んでいる時や疲れている時、血圧が低い時に適しています。また、高齢の人などの部屋に飾ったり、プレゼントしたりするのも適しています。逆に陰の花は鎮静作用があり、気持ちを落ち着かせてくれるので、イライラしたり血圧が高い時、寝つけない時に飾ると効果的。陰と陽ははっきり2等分されるのではなく、中庸の部分があります。花の中庸は、ピンク系などの、パステル調の色があてはまる。リラックスし、優しい気持ちになることができます。



④「気」に合った花選びを

- ・もう一つの重要なポイントとして、病気別・症状別に花を選ぶ時は五臓と五色の関係をもとにします。ただし東洋医学でいう五臓とは、現代医学でいう臓器とは少し異なり広い範囲の機能を示します。「肝」－肝臓、胆のうの働きに加えて、血液調節、精神活動、目の機能まで含みます。これらが不調な時、上昇した「気」を下げて良い影響を与える青い花が効果的であります。さらに五行には、互いが助け合う「相生」（そうじょう）と、一方がより強い「相克」（そうこく）の関係があるので、これを当てはめると、「肝」には青を中心に紫、白、黄、緑が良いということになります。「心」－心臓及び循環器系、小腸、神経系などの機能を含む等々という内容のものです。

花屋さんには、花を飾る技術や知識・花を販売するという技術をお持ちですので、今後はさらにお客様の内面にまで入り、花の持つ能力を最大限に生かしてお客様の病を治すお手伝いをして頂きたいと思います。例えば、夏バテによる食欲不振には「ヒマワリの花」をお勧めします。「ヒマワリは、視覚的に滋養強壮作用があり、胃を温めたり空腹感を生じさせたり、食欲増進に役立ちますよ。」という様にお花屋さんもお医者様や薬剤師と同様に、症状に合せ処方箋とお薬を差し上げる様な仕事もできると思います。お花さんは、人に喜んでいただき又感謝される素晴らしい仕事ですから、良い処方箋で良い花を広げてくださることをお願いして閉じます。

※著者：花療法研究家 片桐義子『花セラピーアレンジメント』より抜粋

2 花とはなそう



名港花き仲卸協同組合

代表理事 所 秀己

めまぐるしい現代社会の中で、私たちが「ほっと」する生活空間を作りたいのなら、花や緑などの自然の力を借りることが一番だと思います。ある人はカーデニングで土に触れたり、植物を育てたりすることで心が癒されることがあるだろうし、またある人は花の香りを嗅ぐだけで、リラックスする人もいるだろう。もっと単純に花や緑を見ているだけで、心癒される人もいるに違いない。この様に花や緑とのふれ合い方には、人によって感じ方が違い様々な方法があります。

今回は、その中で「いけばな」について書いてみたいと思います。当然、いけばなを語る上で、はずせないのは「池坊」である。池坊の歴史は、いけばなの歴史そのものと言えるのです。

いけばなの発祥の地といわれる京都の六角堂、正式名称は紫雲山頂法寺といい、その創建は、聖徳太子が用明天皇2年（587年）四天王寺建立のための用材を求めてこの地に至られた時、霊夢によってここに六角の御堂を建て、自ら護持仏を安置されたと伝えられています。又池坊の由来は、六角堂の北面にあった太子が沐浴をされた池の跡と伝えられるところで、この池のほとりに、遣唐使で有名な小野妹子を始祖とする住持の自坊があったので、「池坊」と呼ばれるようになったそうです。池坊の祖先は、朝夕宝前に花を供えてきましたが、遂には代々いけばなの名手として知られるようになり、貴族の間にいけばなが広がりました。室町時代の後期には、池坊専応が花伝書を著して、いけばなの理念を確立し、華道が成立しました。江戸時代には、家元として、多くの人々にいけばなを指導して、全国に広めました。その後、さまざまな流派が生まれましたが、池坊はいけばなの根源なので、「流」・「派」を名称下につけないそうです。

いけばな池坊には、「立花（りっか）」・「生花（しょか）」・「自由花（じゆうか）」の三つの様式があります。「立花」は、室町時代に床の間に飾るものとして生まれた様式で、野山にある草木が互いに調和する姿を花瓶の上に表現しようとするものです。「生花」は、自然の草木が備わる固有の姿を少ない枝数で端的に様式化したもの。三つ目は、「自由花」で自由な発想と感覚によって表現するいけかたなのです。

（参考：紫雲山頂法寺六角堂、いけばな池坊ホームページより）





こうして、紹介していくと何だか難しそうに感じられますが、そうではありません。つまり、いけばな池坊が、現在まで伝えられてきた背景には、その時々時代に合わせた「変化」があればこそ人々の心の中に受け入れられて来たのだと思います。また、相反する二面である「伝統という不変の部分」と「協調という変化の部分」を合わせ持っているからこそ、日本の伝統文化が多くの外国にまで広がったのだと思います。

いけばなには、自分自身のポリシーを守り変えない「不変的な部分」と、「人と協調する部分」を形に表す面があります。こうして時代の変化とともに、仏に「供える花」から人をもてなす「迎え花」としてのいけばなに、変わってきました。

「今日、いらっしゃる方の好きな花は何だったけ?」、「今日は、私の好きな花を飾って見せてあげよう!」と言って、もてなしの心を表現します。こうした、いけばなを媒体に相手を思いやる心、相手に感謝する心を多くの人たちに分かってほしいと思います。「花育」を通じて花について学ぶのは子供達だけが対象ではなく老若男女を問わず全ての人に、「相手を思いやる心や感謝する心はいけばなを通じて学び、花と話しをしてほしい!」と思います。

私が、人をもてなす時には「相手を想い、あの人は何の花が好きだったのか?」、「今日は、どんな花で迎えればいいのか?」、「今日のイメージの花は…、花の色は…、花の香りは…、器は…」等々に気を使います。そんなことを考えているだけで、なんだか心が癒されてきます。こうした人を思いやる気持ちこそが、元々日本人が自然に持っている考え方です。これこそが日本人的感覚ではないかと思います。家の中に花を飾る空間もそうですが、心の中に花を活けるスペースも絶えず持ちたいと思います。そして、「花育」を通じて子供を育てることも大切ですが、大人の方も含めて「花育」を通じて成長してほしいと願っています。

例えば、バラにはトゲがあり乱暴に扱えば刺されて痛いので、誰でも慎重に扱います。しかし、トゲのない花だからと言って乱暴に扱えば枝や茎は、折れて枯れて死んでしまいます。植物の身になって細い枝や茎には、細心の注意を払い優しく扱う心遣いを持ってほしいものです。こうした思いやりが、やがて優しい気持ちとなり、素直な心が育まれていくでしょう。生きた花を扱うことは、自分の心の中が、あるがままに表現されるので自然に優しさや美しさを感じる気持ちを育むことができるのです。日本人は、長い間「いけばな」を通して花と対話してきたので、心が豊かな人が多いのではないかと思います。これからも長い歴史の間に培った先人の知恵を「いけばな」を通じて若い人へ受け継いでほしいものです。



3 贈花辞退を考える



名古屋生花小売商業協同組合

副理事長 中村 貞雄

随分以前から“有名人”の葬儀には、「供花辞退」が行われて来ていました。私の拙い記憶では約50年位前、トヨタ自動車の重役さんのお葬儀が日泰寺で行われた時、葬儀社を通じて花屋の組合（名花協）に「供花の受け取りを拒否したい。」との申し入れがあり、当時の組合役員が大いに困惑・憤慨し、組合員全員に“通夜1時間前にお供え花を持って日泰寺に集まれ”という強硬手段を構えて先方との折衝を行った。その結果①故人の意志・遺言である事、②全ての御供え（供花・供物・香典）を受け取らない事の二つの条件が揃った場合に限って協力する事で合意をしたのが最初であったと思います。正に「営業妨害」「販売機会喪失」ですから“死活問題”として名花協の先人達は頑張ったのでした。

この二つの条件を満たす葬儀については、厳粛なる慰霊の現場での無用な混乱を避ける為、当時1200余名の組合員全員に遺漏無く迅速に伝える為、有料による「供花辞退連絡手数料」制度を構築し、葬儀組合と合意の上、実施し今日に至っているのです。

これは、営業機会喪失を顧みないで「厳粛なる慰霊の場を維持」する為の花店業界の社会奉仕精神に基づく“苦渋の選択”でもあるのです。

一体全体、「贈り物、贈答品」のやりとりが日本で日常生活に定着したのは何時頃からでしょうか？誰かに物を贈る行為は神代の時代からあったでしょうが、日常的に行われる様になったのはおそらく、三越、松坂屋などの社歴の350年以上前には始まっていたのではないのでしょうか？いや“定着”と言う観点から見れば、もう少し後の時代「元禄」或いは「文化文政」かもしれません。呉服屋さんから百貨店に変身していく過程に、この“贈答文化”が大きく関わっている事は想像に難くありません。いずれにしても、消費文化の拡大と共に“贈答”の習慣が、全国にそしてあらゆる階層に広がって今日に至っていて、非常に歴史のある慣習であり、かつ消費経済の中核をなす習慣となっています。

そして、それが「花」にまで広がったのは昭和に入ってからではないかと思えます。それ以前では葬儀や法事、命日などに“亡き人を偲んで”花が贈られることが稀にあったかも知れませんが、“贈り花”の登場は昭和初期に始まり、本格的には戦後昭和20年代に進駐軍によってもたらされた「母の日」をはじめとする“親しい人へ花を贈る行為”の“日本社会への広がり”からではないのでしょうか？

さて、そんな贈り物としての「花」が、というより「花だけ」がなぜか“受け取り拒否”をされています。理由は幾つかありますが、どの場合も配達した花店にとっては“何ら関知し得ない”もので、その場で引き取り・持ち帰りを求められるのは“理不尽”と言わざるを得ません。花は生もの（ナマモノ）で、しかも完全に商品化してありますから、ご依頼主の指示の無い限り持ち帰りは出来ないのです。もし、ご依頼主の指示のないまま、どうしてもと言うのであれば、その商品をそのままご依頼主のところへお届けして、受け取って頂く事になります。

通常、デパート等から届く贈り物（花以外）を受け取り拒否した場合、届けた配達業者、それを依頼したデパート側は、必ずその贈り物は、お客様である買主（依頼主）の所へ届けて取引の完結を試みます。ところが、その様な事を「花」の場合で試みますと、お客様（ご依頼主）が大変困られるのです。当然です。極めて用途の限られたナマモノ商品ですから。まさか先方が受け取ってくれないからと言って、お供え花をお客様（ご依頼主）の所へ届ける訳にはいかないのです。



この様な場合、われわれ花店は、“忍び難きを忍び”半額のご請求、又は全額不請求などの大きな犠牲を払って、「お客様（ご依頼主）のご迷惑」を回避して来ました。実は、これらのケースの大半はお葬儀への供花の場合でした。「ご供花・ご供物・ご香典の儀は固くご辞退申し上げます。」という喪家・喪主の意向に、営業機会の喪失を承知の上で協力してきた、いわば“社会奉仕”的活動であります。

しかしながら、最近、お祝い花や楽屋見舞い花などの、ごく普通の花店の営業行為についても“受け取る側の都合”（置く場所が小さい。店が汚れる。管理が大変。返礼が面倒等々）で、いとも安易に辞退と称する受取拒否がされています。当該花店にとっては全く迷惑な話で、かつ理不尽極まりない話です。

・ご依頼主（お客様・顧客）から電話でご注文を受け、ご希望の花材を入れお好みのデザインで、お作りし、ご依頼主に代わって先様へお届けする。・・・これで我々の業務（仕事）の90%以上は完了しています。商売としてほぼ完結しているのに受け取り側の都合で全てを否定される！！———どのように考えても「理不尽」としか言えない！のです。

この様な時、私たち花店は“生活の掛かった「死活問題」”として毅然とした対応をして“身勝手な辞退”の縮小、減少を企ていかなければなりません。この問題は真に「蟻の一穴」でして、10年来の右肩下がりの花き業界に、致命的打撃を与えかねない“ゆゆしき問題”なのです。「毅然とした対応」の模範例を是非寄せ合って、統一した行動を摂りたいものです。

ところが、地域によって異なる「葬儀の慣習」等の影響もあって、東京、大阪はじめ全国でこの問題に対する対応や考え方が違うのです。前述の様な基本的認識はどの花店も一緒ですが、自店の顧客へのサービスとの観点からか、花店毎に異なった対応が成されているのが実情です。

「自店の保身」が優先され、業界全体の問題として捉える「問題意識」が不足しています。これは、末端小売店だけの問題ではなく、生産、市場、種苗の各分野にマイナス影響するもので、当然看過出来ない事でありますから、改めて「問題提起」と「問題意識の共有」を訴えるものです。

「供花」ばかりでなく、「祝花」や「贈花」までもが“辞退”され、これを、唯々諾々と受けて引き下がらなければ為らない様な事態は、何としても避けなければなりません。しかしながら、既に「祝いスタンド花」が強引に“辞退”されていますし、宝塚劇団公演の楽屋への「贈り花」も受け取り拒否されております。理由は様々で花店の対応にも問題があります。しかしながら、宅配便によって一時にどっと届けられる“巨大な胡蝶蘭の箱”にも問題があります。花店が直接お届けする場合は、先様のご希望やお考えを伺いながら“相応しい”飾り方をしてお届け先に喜んで頂くべく努力して来ますが、極めて事務的に宅配便業者が置いて行く「箱入り蘭鉢」には、お客様に“拒否反応”が芽生えてしまうのも解らぬでもありません。

人気商売の役者さんは、“ファンからの贈り物”ですから、自分の“人気”のバロメーターとして気持ちよく受けとって頂けますが、流石にあの巨大な「箱入り蘭鉢」の箱から出す作業と箱の処分には、きっと困っていることでしょう！まして人気商売でもない“褒章・勲章受賞者”の方や、それに類する被表彰者の方々、その家族の皆さんの“決して言葉には出来ない「迷惑」”を、業界としてどの様に対処すべきか！？・・・・この問題に正面から取り組まないと、実は「贈花辞退」（祝い花辞退）を回避出来ないのでは？？・・・としみじみ感じるのであります。

昨年も、今年も、弊社で起きた事をご紹介します。お届け先は、さる有名な芸術家のお宅です。花キューピットで胡蝶蘭をお届けしますと、そこには5個～10個の“巨大な箱入り胡蝶蘭”があり、奥様が対処に困っていられるのを見て、弊店の社員が“箱から出す”“ダンボール箱の処理”を申し出て、お引き受けしたのでありますが、胡蝶蘭をお届けした瞬間は、明らかに「不快な表情」をされたそうですから、“放置出来ない”事態と感ずるのです。

私共でお届けした胡蝶蘭は1鉢ですが、弊店の社員の行った行為は、先様のご要望を“業界共通のお客様の要望”として捉える当然のサービスです。先様の申し出を受けるまでも無く、花店が全員“率先して行う”事で、“少しでも気持ちを和らげて頂く”“喜んで頂く”事に腐心したいものです。確かに、巨大箱入り胡蝶蘭を遠方より送りつけているのも、同業の花店が大半です。しかし、産地からの直送も多くなっています。末端小売店だけの問題として、関知を避けていて果たして良いのでしょうか？？！！

4 愛知県の「花育活動」への取り組み



愛知県 農林水産部園芸農産課

花きグループ 主査 田中 良子

I 「花育」とは

「花育」とは、幼児・児童の成長期において、花と緑に親しみ・育てる機会を提供し、やさしさや美しさを感じる情操面の向上を図り、また、花や緑を介して地域のつながりを深めるなど、花を教育、地域活動に取り入れる取組です。

全国段階では、平成20年3月に全国花育活動推進協議会（事務局：（財）日本花普及センター）が設置され、花育活動の普及啓発や花育アドバイザーネットワークシステム運営などが行われています。

II 「花育」の効果（「花育」の教育上の効果）

- ①感謝する気持ちを育む
- ②やさしい気持ちを育む
- ③探究心や想像力を育む
- ④人とのつながりを作り、広げる
- ⑤子供だけでなく家族や周囲の人々へもよい影響を及ぼす波及効果への期待

III 花の王国あいち推進事業での取組

本県は、愛知県花き温室園芸組合連合会、愛知県経済農業協同組合連合会とともに、「花の王国あいち推進事業」として花育活動を行っております。

（1）地域における花育教室の実施

花き生産者、流通関係者、公益社団法人日本フラワーデザイナー協会等が小中学校に出向き、花の栽培の説明やフラワーアレンジメントの実習等を開催し、花に親しむ機会をつくりました。



花き生産者による花育教室



アレンジの花を選ぶ子ども達



(2) 花に込めたメッセージ募集

花を贈る時に相手に伝えたいメッセージを県民から募集し、平成21年度は、日頃の感謝の気持ちや、お世話になった方にお礼を伝えるメッセージが970名から寄せられ、多くの方に花への興味や関心を持っていただきました。



応募があったメッセージ

嫁ぐ娘 父の日、誕生日 いつも忘れず花を添えたプレゼント そんな君が嫁ぐ 悲しい、寂しい、嬉しい 複雑な思い 涙を堪え、花を贈りたい いつでも、これからも、かわらざーと幸せでいてほしい。

(3) あいち キッズ・フラワー・フェスタ

花とふれあうことで、子供達の優しい心を育て、花に親しむ習慣づくりを推進する花育を目的として、第1回は中部国際空港セントレアギャラリー（平成21年11月7日～18日まで）で開催しました。今回、第2回となり、愛知名港花き地方卸売市場（平成22年7月25日）で開催しました。子ども達は、フラワーアレンジメント、花に関するクイズ等で花を楽しむ体験ができました。

また、2回目では、子ども達が実際に機械を操作しながらセリの体験を行い、花の流通についても楽しく学ぶことができました。

あいちキッズ・フラワー・フェスタ2009



あいちキッズ・フラワー・フェスタ2010



公益社団法人日本フラワーデザイナー協会愛知県支部から講師を招き、親子でフラワーアレンジメント

機械セリの体験

(4) フラワー・ブラボー・コンクール事業での取組

愛知県をはじめ、中部7県1市と中日新聞社で、学校花壇コンクール（フラワー・ブラボー・コンクール）を実施しています。このコンクールは、子供達が種から花を育て花壇作りを行うことを通じて、花育および学校環境美化、地域と学校との連携強化に取り組んでいます。

平成22年愛知県参加校数137校（名古屋を除く）



平成22年春花壇コンクール
愛知県大賞（東浦町立西部中学校）

(5) フラワーウォーク

愛知県花き温室園芸組合連合会が提唱した「フラワーウォーク」は、愛知県としては「大人への花育」として推進しています。この運動は、男性も気軽に花を持って街を歩こうと呼びかけるもので、花の消費拡大も目指しています。毎月1回、県庁職員（約400名）が県花き連や愛知名港花き地方卸売市場に依頼した500円の花束を購入し、それを持って街を歩いて帰っています。また、各地域農林水産事務所でもフラワーウォーク運動の輪が広がっており、例えば海部農林水産事務所では地域特産のハナショウブを使いフラワーウォークが行われています。



愛知県庁本庁舎前でフラワーウォーク



ハナショウブの花束

(6) 今年度の取組

地域における花育教室の開催（6月～3月、随時）、花に込めたメッセージの募集（募集期間7月1日（木）～9月10日（金））、学校花壇コンクール等、花き関係団体と連携・協力しながら、花育活動を更に推進していきます。

今年度の愛知県の花育活動について、詳しいことの間い合わせは
愛知県農林水産部園芸農産課 花きグループ 田中まで
TEL 052-954-6419 FAX 052-954-6932



■お問い合わせ先

愛知名港花き地方卸売市場

愛知名港花き卸売事業協同組合 事務局まで

〒455-0027 名古屋市港区船見町34番地の10

TEL:052-747-8700 FAX:052-747-8750

URL:<http://www.amk.or.jp> E-mail:tmizuno@amk.or.jp

■発行：名古屋市市民経済局市民生活部消費流通課

愛知名港花き卸売事業協同組合

※この冊子は、古紙パルプを含む再生紙を使用しています。